

第1回 北九州市小中一貫教育検討会議

【会議要旨】

1 開催日時

令和2年11月19日（木） 15:00～17:00

2 開催場所

小倉北区役所 西棟5階 503会議室

3 出席構成員

11名（構成員定数：12名）

4 議事

- (1) 国の動き・北九州市の取組説明について
- (2) 今後の進め方について

5 会議経過

(1) 教育長あいさつ

教育長 教育長の田島でございます、挨拶をさせていただきます。

皆様におかれましては、大変ご多忙の折、本会議の構成員をお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。

国の動きでございますが、11月13日に文科省の中教審の特別部会というものがございますが、そちらのほうで新しい時代の初等中等教育の在り方に関する方針案が出されました。

その案の中で、小学校6年間、中学校3年間と分断するのではなく、9年間を通した教育課程、指導体制、教師の養成等の在り方について一体的に検討を進める必要があるというようなことが示されております。

また、3年前になりますが、平成29年3月に新しい学習指導要領が出ております。これは、今年度小学校から新しい指導要領が開始されておりますが、この中で小中学校のつながりを明確にしたキャリア教育、そういったものの充実を進めるようにということがすでに求められているところでございます。

本市においても、今日の会議の中でもまた説明させていただきますが、すでに平成25年度、「小中一貫・連携教育基本方針」というものを作成して、今までも小中一貫・連携教育というものは推進

してまいりました。

ただ一方で、この基本方針につきましては、すでに7年以上が経過しております。この基本方針の今までの進捗の状況、そういったものを踏まえて、今の現在の国の動きなども参考にしながら、内容などに関しまして、再度検討する必要があるというふうに、私どものほうでは考えております。

こういう状況の中で、今後の方向性を定めていくために、本市における小中一貫や連携教育の成果や課題を整理するため、そしてまた1番必要なのは、学識経験者だとか実務経験者、保護者の皆様、あるいは学校現場の関係者、そしてこの学校を支えていただいております地域の方、そういったさまざまな方面の方から広く意見をいただいて、反映することが重要という思いから、この会議の開催に至ったところでございます

構成員の皆様には、それぞれのお立場から、日頃の活動だとか、経験を通して得た知見につきまして、忌憚のないご意見をいただきたいと考えているところでございます。

この会議は、来年度まで予定しております。少し長い会議になると思いますが、構成員の皆様の格別のお力添えを賜りたいと考えておりますので、ぜひよろしくお願い申し上げます。

(2) 座長の選出及び座長代理の指名

「北九州市小中一貫教育検討会議開催要綱」第4条の規定により、座長は恒吉構成員が推薦され承認、座長代理は小森構成員が指名され承認。

(3) 座長あいさつ

座長 こんにちは、僭越ですが、取りまとめと皆さん方の意見を忌憚なく出していただけるような進行に努めていきたいと思っています。

感染症対策のために、私たちの勤務する大学でも教授会だとか全てオンラインで行われているので、こういった対面でやる会議は本当に久しぶりで、私のほうがドキドキしている感じですし、このような状況でマスクでしゃべるのもあまり慣れていないということになりますが、お互い今の動向の説明を受けながら、今後の北九州の小中の教育の在り方について、どこまで議論をして、どう整理をしていくのかというのを皆さん方も迷っているところがあるかと思いますが、これはまだ具体的な計画ではないので、例えば予算の裏付けだとかいう形でもなく、どう進めていけばいいのかということな

どを、忌憚なくいろんな意見や論点を出していただいて、取りまとめていければと思っていますので、ぜひよろしく願いいたします。

(4) 議事① 国の動き・北九州市の取組説明について

座長 早速ですが、議事を進めていきたいと思います。

今回は初回の会議ですので、まずは北九州市の取組を事務局から説明させていただきたいと思います。

次第の裏を見ていただくと、今日お配りの資料ならびに参考資料もあって、私たちが押さえないといけないという情報がかなりありますので、前日に資料は送っていただいています。事務局から、北九州市の状況について説明いただいて、その段階で質問があれば出していただき、それを確認したあと、国の状況を踏まえて意見交換という形で進めていくということを予定しておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、事務局から北九州の状況について、ご説明をよろしく願いいたします。

根橋指導企画課長より説明【資料1～4】

座長 ありがとうございます。

今の資料4までの事務局の説明に対して、ご質問等あればいただきたいと思います。

おそらく今の説明を聞くと、小中連携教育として議論すべきところと北九州市の教育の現状について議論すべきところとどう整理していくのかということなどが難しいので、そこのところは皆さんの意見も受けながら事務局とまた調整をしていきたいと思っています。

今、答えられる範囲でよいのですが、私から質問です。この資料4は小中一貫・連携教育の現状ということになっていて、資料3の基本方針を受けて、資料4でどのような現状にあるのかという話だと思のですが、結局、この小中一貫・連携教育をする前と取り入れたことによって何が変わったのかということの総括というか点検は行われて、要はどういう評価が行われているのか、例えば私の理解だと、中1ギャップの解消とかということも念頭に置いていたけれども、最近の状況を見ると、小中連携では解消できていないとい

う現状にあるというふうな理解とかでよいのかとか。

この以前と以後でどう変わったのか、要するに小中連携をやらない、大げさに言うと、小中連携を止めて小学校は小学校で頑張っていく、中学校は中学校で頑張ってくれとやったほうが、効果が出るものと出ないものとかがあったりするのかなという気もしたので、要するに連携をすることによって何か数値が変わったとか、評価などがあれば教えていただきたいと思います。

事務局

正直申し上げますと、この基本方針そのものが、数値目標やここをこう改善する、この数値をこう改善していこうというところが示されているわけではなく、そもそも指標がない状況ですが、まずは交流から始めようというようなところをつくったというふうに聞いております。

そのため、一番最初に交流の話が書いてあると考えています。実際交流についてはかなり学校で取組が進んだというふうに聞いていますが、そういう面では、成果が上がっているのだらうと思いますが、例えば中1ギャップですとか、学力の面とか、そこにどう寄与したかというところについて、まだ正直に言うと、正確には分析できていないと思います。

一方で、どのくらいそこに寄与したかという分析をするのはちょっと難しいだらうなと思います。

構成員

関連していいですか。北九州市の状況というのは、私は正直申しまして、北九州市から派遣していただいている院生から、いろいろ聞いて知っているくらいなので、今日は教えていただけて本当に助かったのですが、今の内容に関連して、まずもって私の感想ですが、前回は小中一貫・連携教育ということを謳って、連携教育を非常に丁寧になさっているなというふうに思いました。

例えば共有活動とか、スタンダードとか、本当に市ぐるみで連携をしっかりと図るぞというところで、要は何を言いたいかというところ、小中学校の段階の先生方はお互いに、情報を交換したり、そういうことなどを通じて、小学校教育と中学校教育の円滑な接続、ここが一番連携教育という観点で大事にしていく必要がある。

ただし、連携教育の内、さらに突っ込んで、例えば子どもの状況を小学校、中学校がしっかり共有して、コアカリキュラムと言われる9ヶ年を通したカリキュラムを編成しているというのが一貫教育

ですよ。

その辺りで、まず質問したいのは、前は小中一貫・連携教育ということですが、今回は小中一貫教育になっている。ですから、これから検討していくときに、何を目安に捉えるかという意味で、基本的に僕の考え方は、連携教育の中に特化して一貫教育という形がある。その辺りで、いや一貫教育までさらに目指すんだということなのか1点質問です。

2点目は、そうなれば例えば座長も質問されましたが、ここの一貫・連携教育の現状もよいのですが、その成果と課題は何だろうかと思ったんです。

大体、国の考えは3つですよ。平成18年から宗像市がいち早く小中一貫校をやっているから、僕はその座長をやっていたから、大体全国3つなんですよ。要するに中1ギャップの解消、それから学力向上、それから教員の意識改革がもうベスト3なんです。

これについて、どんなふうに変容したかという、1年もしますと、宗像の場合は中1ギャップが随分解消した。それはそうですよ、解消するためにやったんだから。

ところが、残念ながら、私もだいぶ言ったけど、中1ギャップではいかん、小中ギャップやろう、小中ギャップで考えないと、中1ギャップに狙いをおいたら、前期、中期、後期と私は考えましたが、5、6年と中1、そこにバッサリメスを入れると。それでは逆に、小5ギャップが生じるとか、そのようになったのだろうというのを僕が平成25年のときに宗像市にかなり突っ込んで言ったんです。

だから小中ギャップで考えないと、国は中1ギャップと言いましたが、やはり中1ギャップというのは小学校の1年生からずっと影響しているんだからという形で、そういう経緯があった。

ですから、もう1つ聞きたいのは大変難しいかもしれませんが、今の段階で、その交流活動は非常に高頻度でされている、それからスタンダードもやっていると、ところが、この平成25年の基本方針から7年間やられてどうところが成果で、どこが課題か、この辺り特に中1ギャップとか、学力向上とか、教員の要するに9ヶ年で育てるという意識とか、この辺りは分からないいいのですが、いかなものかなというところをさらに聞きたいなど。

事務局

この後ご説明しようかなと思ったのですが、今ご説明をさせていただきます。

まず、最初の話にありました、一貫教育、前は一貫・連携教育だったけど、一貫だけというところで、先ほど申し上げたとおり交流についてはもうかなり進んできていますので、その交流だけではなくて、さらに一歩進めるという意味合いで、連携という言葉を外しております。

ただ、おっしゃるとおり国が考える連携教育の中に一貫教育が入っているということで、我々も当然そういうふうを考えていまして、小中一貫校をいっぱいつくっていくというようなことを念頭にしているわけではないです。というのがまず1点目でございます。

成果と課題のところでございます。ここはなかなか難しいのが基本方針そのものが、こういう取組をしていきたいと思いますということが、書かれているので、その取組についてはされてはいます。

ただそれがどこまで効果があったかというところについては、そもそも指標を設けていなかったのもので、我々がどこまでしっかりフォローアップしてきたかというところ、そこは先ほど毎年やっている調査、交流の状況とか、そういう数値面はある程度出していますが、それ以上のものはあまり分析をできていないというところが正直なところでございます。

学力・体力向上については、室をつくって、市の教育委員会全体で取り組んできましたが、そこで例えば小中の連携のほうはどういうプラスになっているとか、そういうことの数値的な分析までは、今のところはしていないと思います。

参考資料集を見たところでは、小中一貫が学力面のプラスがあるとか、そういう研究とかあったりとかするとは思いますが、そこまで踏み込んで分析は、今のところはできていないと思います。

このあと、意見交換していただきたい、ここについては特に分析をしてほしいとか、そういうところもあれば、ご意見をいただければありがたいなと思っております。

我々としては、繰り返しになりますけれども、交流だけじゃなくて、実績やそのカリキュラム面とかも含めて、一貫でやっていくためにどこをどうしていったらいいかということ、この会議で検討いただきたいと思っておりますので、その観点でご意見いただければありがたいと考えております。

構成員

今のところは、先ほどのスタンダードカリキュラムは、市全体でつくっていますよね。

私を知りたいのは、一貫教育になってきたら、おそらく、その中学校校区のこだわりのコアカリキュラム、それがどうしても必要ですね。この辺りの現状をちょっと聞きたかったのですが、またこの検討会の中で、現場の先生がおられますから、一貫教育として目指す、要するに9ヶ年、スタンダードだけはもう当たり前ですから、連携教育の場合はどこでもやっている、でも一貫教育になってくると、やはりそこはコアカリキュラム、背骨のカリキュラム、これがなかったら倒れますから、その辺りの現状について、現場の方もおられるから意見を拝聴したいなと思います。

それを聞かないと次に進みようがないので、連携・一貫教育というところで、連携ももちろんして、国が目指しているやはり9ヶ年で子どもを育てていくというような、要するに濾過部分の連携に留まらずということで確認してもらえますかね。

事務局 はい、分かりました。

座長 今回のやり取りが全体の方向性にも関わっていますので、このまま残りの資料5、6の説明をしていただいて、もし質問があれば、意見交換も併せてその後いただきたいと思いますので、資料5、6の説明をお願いします。

事務局 **根橋指導企画課長より説明【資料5、6】**

座長 ありがとうございます。

この会議自体、最初に説明があったようにちょっと時間をおいて、何回か会議をしていくということが予定されています。

というのは、今説明していただいた資料5のこの国の動きというのは並行して動いていますので、国がどういうことを例えば緩和したり、そういう可能性が出てくるのかということも意識をしながら、本市でいち早く対応していくとか、こういう条件があるのならこんなことできるのではないか、むしろしてほしいとか。

私たちはこの会議では、あまり現実的なことというか、予算とかそういうことをあまり考えずにいろいろ意見を言って、説明があったように基本方針を場合によっては改定するということになっているので、基本方針については私たちが意見をとりまとめるというわけではないので、基本方針をこういうふうにやったほうがいいとか、

自由に意見を言えるというようなことで、責任はないけれども権限があるみたいな、そんな感じかなと思っています。

最後説明があったように、この資料6に関して、この会議の中で事務局のほうに答えていただくともう残り1時間を切っているような状況なので、データを準備して説明していただくとか、その準備を次回以降進めていきたいというふうに思っていますので、皆さん方のご質問だとかご意見だとかを、あらかじめ今日は4分ぐらいで、言っていただければということ連絡がはいつているかと思いますが、そういった意見等あるいは出てきた意見を聞いて感じる事等あれば、それらを付け加えて、今日は私たちの確認事項等、今思っていることとか期待していることを言って、次回以降の参考にできればというふうに思っていますので、早速ですが、4分ぐらいずつ、ご意見をいただければと思います。

ここまでの中でご質問等あればそれをすぐに回答していただく時間を取ってしまいますので、ここここはちょっと分からなかったもので、また資料なり今後説明が必要な時にお願いますという形で、質問意見を踏まえて順番にいきたいと思います。

私は一番最後に発言したいと思いますので、順番に4分ぐらいご意見等まとめて話していただきたいというふうに思います。

構成員

失礼いたします。時間になったら止めてください。

ずっと説明を聞きながら、先ほど少し申しましたが、これまでの北九州市さんの取組は非常に連携教育の充実・定着をかなり進められていることが理解できました。

今後、この会議でやっていくとなると、今回の20年度の基本方針に実は書いてあるのですが、(2)のところに書いてある、そのとおりのところはいいと思いますが、ここには一貫教育のこともかなり書いてある。つまり、小中で目標を共有して、それに迫る9ヶ年のカリキュラムや教育活動を一体的に捉えて推進するという事でしょう。

しかも、地域家庭の理解や協力ということですが、ここはもう理解や協力じゃなくて参画まで入れたほうがいいと思いますが、というところで、僕はこの小中一貫教育のゴール像は、ここを少し明らかにすればいいかなと思いました。

私の意見としては、9ヶ年のコアカリキュラムを重視して15の春の子どもたちを目指して、9ヶ年で育てていこうというための指

針を出せばいいんじゃないかなと、その時に学校だけではもう限界ですから、ある意味、地域と共にある小中一貫教育というお題目に変えていただければ、非常に僕はありがたいなと。

その意味は何かというと、私は専門的にコミュニティスクールをつくっていますので、北九州市のコミュニティスクールというのは、はっきり申しまして、これはどっちかと言うと、積極的な学校評議員制度そういうことはありませんが、学校評議員のほうなんです。

でも国が言っているのは、どちらかと言うと学校の自由という学校の自主・自律を確立するために、意図的に承認という権限まで持っている。お互いに win-win な、お互いに対等で議論できるようにという条件をつくった制度が学校運営協議会制度でございますので、ぜひそこに向かって、そのゴールは地域と共に成長する学校という、地域と共にある学校ですから、あそこを地域と共にある小中一貫教育検討としていただくと、何となく群像が掴めるなと。

次にやり方ですが、私の経験上10何年間か小中一貫、全国で関わっていますが、いつも問題になるのが、このように学習指導とかいう進め方ではなくて、簡単に申しますと、施設一体と併設と分離は全く別ものです。

宗像には、大島のように施設一体の学校、今日は午前中そこにいましたが、施設分離の小中学校は別の研究なんです。

ですから、ここもこれから方針を立てて、具体化するときには、学習指導の点からのところではなくて、施設の分離とか施設一体、そして、施設一体の場合は多分、義務教育学校のほうもつながってきますから義務教育学校ということも含めて、施設一体、施設分離、施設併設という形で仕分けして、ここで議論して1つの検討をしてまとめていくほうがより合理的じゃないかなと。

それを現場に取り入れる、取り入れた人たちは現場でしっかりきちんと議論して、学習指導とか交流活動とかいうのは当然これだけの財産で。ですから、私の言いたいことは、そういう整備の仕方では今後進めていただいたらどうでしょうかというところで、ぜひ僕は縦と横の要するにコミュニティスクールと地域と学校家庭連携と小中一貫は親和性がありますからね。

だって地域にとっては別に小中一貫じゃなくても、小中という眼鏡で見えていますからね、保護者もそうでしょう。見てないのは学校だけなんです。大きく間違っている。

それを僕が関わったところは、残念ながらまず学校で小中一貫校

をやって、そのあと地域と共にと言っていたのですが、大きな失敗をしました。逆に地域の保護者のほうが小中全部見ているからね。

ですからぜひ地域と共にある小中一貫教育という形で取り組んでいただけたら、私も積極的に意見を出したいと思います。

以上でございます。

構成員

九州国際大学では、教育制度論などの教職課程科目を主に担当しております。

私は中国の天津市の出身です。

来日してから、大学院で教育行政学という学問を学び、特に公立学校教員の人事制度を対象に研究してきました。

日本の小中学校には、女性教員がたくさんいますが、女性校長の割合がとても低い状況で天津の状況とは全く違っていました。

この議論から10年以上、全国各地の教育委員会に足を運んだり女性校長に話を聞くなどして、都道府県の教員の人事制度の実態を分析してきました。その経験から、日本の女性校長先生のことが大好きになりました。この場には男性校長先生もいらっしゃるようで、大変失礼いたしました。

このようにやや狭い文野で研究していましたので、この場で適切な意見を言えないのではないかと心配していますが、できる限りお役に立てるよう頑張りたいと思います。

では、その資料6の議題に沿って話をさせていただきます。

まず問1の小中一貫教育の推進に関して、検討していくべきこととしてどのようなことがあるかですが、まず教員の採用について、先日日本教育新聞でも紹介されましたが、小学校の教科担任制導入の先進自治体として、群馬県の事例があります。

群馬県では、教員の小中学校免許状の併用率が高いのですが、過去には、採用を行う際に小学校免許の取得を誓約するという取組をしていたようです。

本市が、小学校の高学年の教科担任制を進めるならば、まずは人材の確保が必要で、現場の教員のために異なる学校種の免許を取りやすい体制をつくったり、採用時、他校種免許状を持つ、あるいはその取得を希望するものを優先したりするなど、インセンティブや一定の規制を設けることが必要だと考えます。

また、教員の異動、学校のみドルリーダーや管理職が理解を示さなければ小中一貫教育は進んでいかないと思います。

今後、人事交流の促進によって、小中学校の勤務経験を持つ教員が増えると思いますが、そのような教員をみドルリーダーとして積極的に位置付けたり、管理職初任のための加点、あるいは条件とすることで、小中一貫教育がさらに推進されると考えます。

ただし、今後、小中一貫・連携教育を進めることになった経緯、教員負担軽減という視点をどれだけ取り入れるかは大事だと考えます。小中一貫・連携教育と教員の働き方改革をコラボで考えていく必要があると思います。

例えば、共通の研修教材作成や、ICTを利用して会議の時間、回数を減らし、移動の負担を軽減できる方法、教師の持ちコマ数の軽減などを検討することです。

それから、この資料の問3について、収集しておくべき資料、本市の小中一貫・連携教育の実施は8年目を迎え、先進タイプの調査や定着せず失敗した学校校区を調べることで、成果・課題等の共有ができると考えます。

また小中一貫・連携教育推進リーダーの立場、視点が大事だと思います、できれば推進リーダーの話も聞けたらと思います。

以上ですが、これらによって教育委員会の皆さんも多忙にならないようにしていただければと思います。以上です。

構成員

私は、平成25年1月、基本方針が出た頃に、教育委員会の会議でこの方針について拝見しました。

その当時の北九州市の現状としましては、本当に小学校と中学校の先生方の交流も人事交流もそれまで全く私の知っている範囲ではないような実態があり、小学校は中学校の先生と同じ校区でありながら、小中学校の先生方お互いに話す機会もない中で、小中一貫・連携教育をこれから進めていくにあたっては、まずは交流、まずはお互いを知ることから始めないと、大命題とか理想とか目指すところとか、そういったところがあっても、まず交流してお互いのことを知るところからしないと始まらないのではないかと私自身は理解しています。

スクールカウンセラーとして学校を訪問している際に、たまたま

交流の現場に立ち会うことができ、大変現実を知る勉強になったのですが、校区によっては、本当に校区の子どもたちの実態をつぶさに分析して、9ヶ年でどういうふうに関わっていくか、その学校の場合は、自尊感情とかがテーマになっていたのですが、9年間を通してこの校区の子どもたちにいかに自尊感情を高め、学習意欲を高めさせていくかというような取組をしているところもありました。

しかし一方では、例えばこんなことを経験しました。校区清掃があって、その校区の小学生と中学生がみんなで校区を清掃するということだったのですが、たくさんにグループが分かれていまして、各グループの中に、小学生と中学生が何人かずつ入って、そして小学校と中学校の先生がそこにつくのですが、校区清掃の時間に清掃する箇所は小学生はここ、中学生はここ、小学校の先生が小学校の子どもに掃除をさせ、中学校の先生が中学生に掃除をさせるということで、一応同じ校区は清掃しているけど、先生も子どもも交流していないというような実態がありました。

それから、職員研修という今回出されたグラフの中にもあって、実際校区の小学校と中学校の先生が集まって研修しているのですが、広い部屋で研修しているのですが、自由に座るようになってるので、中学校の先生は中学校の先生で集まって座り、複数の例えば2校の小学校の先生はそれぞれの自分の小学校の固まりでお座りになって、そして前の講師の先生の話聞いたあとは、全くそこで何の言葉を交わすこともなく解散している。校区によってそれぐらい交流の現実に差があるなと実感したわけです。

それは少し言葉に語弊があるかもしれませんが、そんなふう以小中一貫教育を進めていく上で、交流ということは今までやってきた中でさえ、それぐらい質の差があるということを考えてときに、この小中一貫教育がなぜ必要で、子どもたちにとってこれを受けることが将来に影響するのかということの意識、その意義が浸透していくということがないとなかなか難しいのかなと一方で感じています。すみません、全員の先生ではなく一部そういう先生がいらっしゃるということです。

そういうことを考えながら、私自身もまだ不勉強なところがたくさんあって勉強させていただくんですけど、スクールカウンセラーとして学校を伺っている関係で本当に子どもたちに届く小中一貫教育になっていく仕組みというのに大変関心を持っているところです。

あまりこの1、2、3、4に関わってなくてすみません、失礼しま

した。

構成員

それではちょっとこの保護者の目線からというところで、私ももう13年ですかね、PTA会長、そしてその13年プラスおやじの会とかでも活動はさせていただきました。今PTA協議会では会長をさせていただいて、7区の門司から若松、それから八幡西のほうまで、いろんな地域の方と接することが多いんですけど、特にさっきも先生がおっしゃりました、地域コミュニティスクール、これは非常に大事だなと思っております。

小学校と地域のセンターというのは大体同じ年なんですよね。小学校が150周年であれば、センターも150周年、それに付随して中学校が10年、20年遅れというような周年でよくあると思うのですが、この地域コミュニティスクールというのが非常に大事だなというのは、要は地域の人たちの要望はどういうものかということで、多分あとで構成員の方からまたいろんな話が出るかとは思いますが、私もここは非常に重要視しているところでありまして、この4、3、2という、この前、中、後のところをつくることによって意識改革、意識がどう変わるかということに関しましては、要はこの小学校5年生から中学1ギャップに関しては、非常に心と体のバランスがついてこないというところで、この小学校5年生というのは私も何人か経験しましたが、非常に心と体、体力、ここがなかなかついてこれなくて、中1ギャップになったときに、これは僕が小学校の会長をして、中学校になったときに、中学校の校長先生に、「あの子ども」と聞くと、「変わったよ」と、「今こんなことやっているよ、たまにちょっとお調子に乗るけど、でもあの頃とは違うよ」と。やはり連携することによって、その子のことについて、みんな持っていつてくれているということなんです。

要は個別に見てくれている、それは非常にありがたい、嬉しいなということ、大事なことだなと思うのですが、一人一人の子どもたち、そしてその子どもに対する親目線、そして親としての気持ちを持っていただけるということ、親がどうあるべきかということ、これ親育ちなんですけど、まずはその親育ちの中でも地域と一緒に育っていく、交流をすることによって、親・子ども・先生・校長先生、皆さんが育っていける、その場がある意味地域として、そこが基準となると思うんです。

そうすることによって、この1つの地域が、そして、北九州市の

7区が、いろんな形で地域性はありながらも子どもに対する親の気持ちは変わらないというところで、あとは学力をではどうするかという、今からは親も一緒に学ばないといけないということも非常に大事なところだと思いながら、その中で、先生方の話にもありましたが、教員負担軽減イコール働き方改革、そういった時代の波に乗りながら、子どもたちと一緒に子どもたちの学校の学び方改革、学び方も変わっていかうとしております。私たちの考え方も変わらないといけないと思います。気持ちは変わらなくてもいいのですが、考え方を変えて、子どもたちと一緒にいつまでたっても学びというところで皆さんと一緒に考えていけたらなと思っております。以上です。

構成員

小中一貫という切り口というのは、地域のものとしてはなかなかピンとこないというところがちょっとあって、具体的な話について、この一貫についての話というのは直接つながらないかなというところもあるのですが、40年近くPTAや子ども会を通して、子どもたちとの関わりを、今も少し形は違いますが続けています。

その中で、特に最近感じるのは10年前、もちろん地域のいろんなお手伝いをしていますので、学校の校長先生、教頭先生、教務主任、管理職と言いますか、そういう人たちとの、当然いろんな話し合いの機会は、今もずっとあるわけですが、10年前は担任の先生たちとの話がありました。

というのが、毎朝立っていると、プチミーティングじゃないですが、「ちょっと相談があるんやけどいいやろか」と担任の先生から来ていた状況がありました。その理由は別にして、そういう面ではいろんな思いを語り合う場があった。最近はどうなのかといたら、いろんな部分で本当に学校の先生は大変だなと思っています。

一番思う部分が、生活体験通学合宿というのが、今年中止しましたが、20年間やっていました。2年間は、要は市のモデル事業と言いますか、それで一応スタートして、2年終わって、地域で総括して、やはり地域の教育力というふうに考えたときに大事な活動だねというところで、それ以降、地域の行事として、取り組んでずっとやってきたのですが、その中で子どもたちが自分たちで強くやるわけで、こういった約束をちゃんと守ろうねということ、3つか4つぐらいの約束を守るためのノルマをお互い確認しながら、一緒に過ごすのですが、その中で子どもたちの状況を見ると、本当に

先生は大変だなという実感です。

そういうことで、さっき話がありましたが、地域と学校、家庭がどうつながるかというところ、地域は今でも大事に考えています。多分どこのところも考えとしてはそう思っています。

地域を考える、考え方、最近挨拶もだんだん少なくなってきたりすることもあるし、学校から地域に望むこととか、それから保護者がすべき、望むこととかというのを語り合う場がないというのが現状です。

一昨年から、地元の学校のPTAの理事会に、実は地域でこのような事業、情報があるけど、ちょっと皆さん方に聞いてもらいたいという話をして、理事会の中に入れてもらったんです。それが、地域の情報を聞いてもらうというのが1つと、あとPTAの活動が今どうなっているんだろうかというところに対する確認というんですか、それが半分はあるというところで、状況を少し見させてもらったというところもありますが、その中で自分たちがやってきたことがどうのこうのではなくて、やはり課題というのが見えてくると思うんです。

だからPTAの皆様方にも言っていますし、学校の先生方にも言っていますが、もっと地域を活用しませんか、地域でできることがあるでしょう、だから忌憚なくこんなことしたいんだけどサポートしてもらえないだろうかとか、一緒にしてもらえないだろうかとかいうふうなのを振ってもらうほうがよいのかなと。

それは、一貫教育の中で活かされることがあれば、それは間接的にはこの活動に寄与できるようなポジションに、地域はなるのかなというふうなところがありますので、そういう部分では、お互いが求める部分をどう共有するかということが必ず必要ということ。それは今のコミュニティスクールですかね、学校運営協議会というものを活かしてやるというふうになるのですが、実はこのメンバーに私は入ってないんです。だから今回、「ちょっとメンバーに入れてよ」と、地元のそういう協議会にちょっと話を早速明日にでも行って、できれば参加をして運営のほうに携わってみたいなと思っています。ありがとうございます。

構成員

自分が経験したことを基に、もう感想に近くなるかと思いますが、話させていただきます。

本校、小中連携教育が平成25年からということでしたが、おそ

らく26年から中島小はそれに携わってきたと思います。その中ではじめの頃は、教員同士が連携の大切さを感じながら進めていったような形です。

中学校の先生が小学校に教えに行ったり、小学校が中学校に行つて体育祭に参加したり文化祭に参加したりという流れがあったりとか、先ほどあった清掃活動があったりとか、夏には教員同士が交流しながら、子どももうまいこと交えて話をするという、いろんなことを進めていました。

私は、今の中島小学校に赴任したときは、前からいた先生からの小中連携の大切さを聞いて、そうなんだと感じて伝えていきました。

今それから比べると、形も方法もだいぶ定着してきたんですけども、教員は回転が速いので、小中の連携の大切さをどう伝えていくかというのは、課題になっているかなというふうには今は感じています。

それから、小中で背骨のコアカリキュラムというふうにおっしゃっていましたが、自己有用感を高めていこうということは課題で、どう取り組んでいくかということは、話し合いをしながら統計を取りながらやっているような次第です。

また、中島小学校は単級なので、教科担任制ということはありません。でも大きい学校にいたときに、中学校教員が小学校に来て教科を担当するということを経験しました。

そのときに、中学校文化、中学校がチームで進めていくというところを肌で感じ、また小学校教員が自分の持ち教科を複数のクラスで担当するというので、子ども同士の生徒指導の連携をとることができるようになったことはすごく成果のあることだったんじゃないかなと思っております。

ただそれが故に、例えば5クラス6クラスの子どもたちが教科も含めての連携をどこでとるかという時間の確保が課題でもありました。それから、今後のことになると思うのですが、小中一貫教育で施設一体型か施設分離型かで違うと先生がおっしゃっていただきましたが、その施設分離型において、4、3、2でいっているところが主なのか、違う分け方で進めているのかという内容がもし分かれば教えていただきたいと思っておりますし、自分自身も勉強していきたいと思っております。以上です。

座長 ありがとうございます。続いてお願いします。

構成員 少し私の経験を話させていただきたいのですが、以前小学校に勤めておりました、もう随分前になりますが、やはりいろいろな課題、生徒指導の問題であったり家庭の問題であったり学習の問題があったり、当時はまだ、小は小で解決をしていくという時代であったのですが、なかなか小だけでは解決しづらいというような課題というか、問題点は抱えておりました。

 ある学校に行ったときに、中学校のほうと個人的な部分もあるんですけど連携をさせていただいて、例えば一緒に家庭訪問に行くとか一緒に地域行事に参加するとかいうようなことをさせていただくことで、様々な糸口が見えてきたという経験が自分にはございます。

 一貫と言っても連携の部分ですが、そういった中で25年に基本方針が出されて、以前に比べると随分小中とのつながりというのは強くなってきたかなというふうに思います。

 私も小学校から中学校に行って、すごく感じたのが組織的な力というか、学年の持つ力、一方で、きめ細かさというのは小学校の特徴でもあったかなと思いますので、そこをどう融合させていけばいいのかかなというところで、考えていたところはございます。

 ただ、その中で、キーになってくるのが我々職員の意識改革というところが大きいのかなと、やはり中学校文化、小学校文化、以前よりも垣根は低くなったと思いますが、まだまだあろうかと思えます。そういったところを、発達段階に適した指導の在り方も含めて、相互理解というのを、より一層深めていく必要があるのかなと感じているところです。

 また近年、様々な教育改革とか様々な課題というのが、ものすごいスピードで動いておりました、正直学校がついていけない部分もあろうかと思っております。

 今後話をしていく中で、大きな目標を掲げながらも実行可能な施策というか、取組というのを検討していくことというのも学校現場としては非常にありがたいかなと感じています。

 また、他地区、他校等の先進的な部分と、どのようにしてそこにもっていったのかというような、やはり道筋というものも併せていただけると、非常に私たちとしては、その中でその校区にあったものというのが選択可能になるのではないかなと思います。

 一口に小中一貫と申しまして、本校区は4小1中というものを

抱えておりました、それぞれ地域性、または学校の特性、児童生徒の特徴等もございまして、なかなか一本にまとめるのは難しいという課題もございます。

そういったものを広く同じ目標を持って、取り組んでいくためにはどのようにしていったらよいかということ、また先生方のご意見をいただくと非常にありがたいかなと思います。よろしくお願いいたします。

座長 ありがとうございました。

構成員 失礼いたします。

本市に採用していただき、まだ4年目の新米がこのような場で発言をしていいのかちょっと恐縮ではありますが、現在私が現場で感じていることをもとにお話をさせていただけたらと思います。

私は、中学校の保健体育の教員の免許を保持して、現在は北九州市の取組で、小学校に入らせていただいております。

そこで感じているのが、学力面についてですが、中学校に行ったときと小学校に行ったときで感じているのが、小学校が45分授業、空き時間が5分、再び45分授業というカリキュラム、中学校は50分授業、間10分、50分というものですが、小学校の先生はお1人で全ての教科を担当しているということもあって、なかなか45分で終わらない授業が多く、例えば1時間目の図工が45分を超え70分授業になる、そのあとの2時間目の算数がたったの15分程度で終わるなど、先生個人の授業の在り方、もしくは得意不得意によっても、ものすごくそのクラス、その学年で学力の傾きが出るんじゃないかなというところは、私が現場に入っているいろいろな授業を見させていただいて感じております。

一方、中学校に関しては、教科担任制なので必ず50分で終わり次の教科の先生への引き継ぎがありますので、そういった部分を私が今現場に小学校に入らせていただいて、一応5、6年生の体育の授業の専科を務めさせていただいておりますので、なるべく授業の時間内に、めあて、まとめ、振り返り、ここまで終わらせて次の授業にいけるような計画をして、子どもたちの学力・体力を伸ばせるようにというところを学校で今取り組んでいるところです。

生徒指導についてですが、私、専任生徒指導主任ということで現場に入らせていただいておりますが、中学校のイメージでいうと、

何か学級学年で起きたときにはその学年の生徒指導、もしくは学校の生徒指導主事に相談・報告をして、どんどんどういうふうにと落ちていくかというところの話をしていくのですが、小学校に入って感じるのは、いつのまにか生徒指導が終わっていると、各担任の先生によっては、もうこの程度でいいやというところで終わったりだとか、それが後々大きなことになったりだとか、そういうところで先ほどからお話に出てきていますように、組織として取り組んでいくというところを、ちょっとどうにか中学校の教員として、小学校のほうに、「ここはこうしていきましょうね、こういうときには皆さんでこういうふうに動いて行きましょうね」というところは、ちょっと広めていけたらなと。

逆に、小学校の先生は本当にきめ細かで、なかなか中学校の先生がそこまでしないようなことまでも小学校の先生がされているので、逆に中学校はそういったきめ細かな指導も意識していければもう少し小中一貫・連携、交流というところもうまくいくんじゃないかなというふうに感じております。

最後に教員の意識についてなんですが、先ほど先生がお話されていました、私が行った中学校でも、小中合同の清掃活動があっていましたが、言われたとおり、各場所は中学校、小学校、全く別々に清掃しております、何が交流なのかなというところは感じておりました。

3校合同研修なんかも自己紹介はあるのですが、じゃあ実際に小中間で何か深めて話をするかと言ったらなかなかそういう時間もなくて、私が中学校にいたときには正直ちょっと小学校の先生とは壁があるんじゃないかなというところを感じておりました。

実際に現場に入らせてもらうと、小学校の先生は本当に全ての教科を持たれていて、かなりいっぱいいっぱいなところがあって、そういったところで北九州市、全国的に取り組まれている教科担任制というところが入っていくことで、学力的にも先生方の意識、負担軽減的なところに関して子どもたちのためにより良い方向に進んでいけるんじゃないかなというふうには、今のところ現場で感じております。

ただ、あくまでも一部しか私は全然見られていないので、かなり適当なことを言っている可能性もあるんですが、今後この子どもたちがどういうふうには9年間を通して成長できるかというところを意識して微力ながらお力添えできたらなと思います。ありがとうございます

いました。

座長 次の構成員をお願いします。

構成員 4月から赴任いたしまして、以前は曾根東小学校にいましたので、ちょっと学校の規模も違いますし、最初は戸惑いました。

今、1・3・4、2・5・6ということでA週B週という形で時程を変えておりまして、ノーチャイムで1日過ごすというような状態です。

私がこのような場でどのような力を出せるかどうか分からないのですが、実際に小学校現場で働いている現場の教員の1人として、教員の立場の不安感だとか、そういうことを取り除いたりすることが一番かなと私自身は考えます。

実際動かしていくのは教員のほうではあるので、そういうところで自分が意見をさせていただいたらいいのかなと思いました。

私は10月より6年生の担任の兼務をしております、このまま中学校へ入学させていいのかなとか、ちょっと卒業までに何とかしなきゃとか、私自身も悩んでいるときであります。

ただ、このタイミングで小中一貫教育というところで、この場にいるということは何か必然かなと感じているところでもありまして、やはり今の6年生、私何度も6年生の担任はしておりますが、やはり中学生に近い、やはり女の子のトラブルとか、男の子はそうでもないですが、やはり今までだと中学生が抱えたような問題じゃないかなという問題を、やはり小学生の段階で抱えているなと思います。

なので、小中一貫というところは重要だなと私自身も今さらながら感じております。

この場に参加させていただく前に、ちょっと勉強させていただきました資料のほうもちょっと必死に読ませていただいて、一番感じたのが、やはり小中学校教職員の間、人事交流、やはりそこが一番かなと私は思いました。教職員の兼務を積極的に進めるところだなと、守恒小の実態で言うと、今の6年生は5年生のときから一部教科担任制を実施しております。

うちのクラスで言いますと、今日1時間目は私が総合をしたのですが、そのあとは図工、専科、理科、専科、音楽、専科、全て子どもたちが教室移動しました、というような感じでもうほぼほぼ中学校形式かなと思います。

計4名の中学校教員がこちらのほうに来てくださっておりまして、5年と6年のほうに体育、担任はしております。外国語は5、6年の外国語科は、専科としてやるということです。それと教頭が中学校出身となっております。

小学校風土と中学校風土の違いというところはたくさんありまして、小学校の教員のほうがどうしても多いので、33学級ありますから、昨年度は、中学校の先生が「おかしいな」とか「こうしたいな」とか思っている意見を言えなかった状態だったんです。

ただし、今回は4人いるということで、校長や教頭とかとも話しているのですが、やはり小学校風土と中学校風土の違いを互いに理解して、それぞれのよいところを吸収し合わないといけない、これは守恒小学校の与えられた使命じゃないかと。

ともに同じ校舎内で同じ子どもたちを中学校に向けて育てていける。中学校のほうから小学校のほうに来ている出前授業みたいなことは、もちろんさっき言われた交流としてあったのですが、やはり同じ校舎内で、同じ子どもたちを一緒に育てていくっていうところはやはり大きな違いがあります。

今後、これはもう本当に後付けのような感じになるのですが、中学校に向けて、指導方法とか指導体制とか話し合う小中学校部会みたいな形のを開こうかと、中学校の教員が4名いますし、小学校のほうからも5、6年の担任から4名程度、ちょっと何かやれないかというふうに考えております。

ただ、小中一貫となったときに、守恒小学校は守恒中にももちろん行くんですけど、企救丘小学校からも1割くらい来るんです。そうなったときに、守恒小の子たちは5、6年で一部教科担任制でちょっと中学校に近い形で経験しておりますのでいいですし、私たちもそういう小中部会を開こうかというところもあるのですが、ちょっと企救丘小学校を巻き込むことができるのかとかそういうことも考えました。

中学校のほうから小学校へ来るということはあるのですが、やはり小中を行ったり来たりする、相互に授業を行ったりとか実際に小中一貫を進めることのできるコーディネーター、今までも講師がいたんですけど、やはり実務も行うリーダー的役割の教員が必要かなと感じました。

あと、もう1点としては、教職員の小中一貫教育の理解を深める研修が一番必要かなと思います。

やはり実際にやりますよというときにハードルが高いかなと、まずは現場の先生たちが理解をして興味を持つ、これならやれそうだと思うなければいけないと思うんですけども。

私もちょっと勉強させていただいて、面白そうだなと、何か守恒小学校でやっていることをもっとレベルアップできるんじゃないかなと、それがつながるんじゃないかなというのも思っているので、ちょっとワクワクしているというところがあります。

あとは実働にあたってはいろいろとあると思うのですが、それはまた先々ということで、ありがとうございます。

座長 それでは、次の構成員。

構成員 よろしく願いいたします。

教務主任になりまして、まだ2年目で、まだ分からないこともたくさんあるような状況です。

今私が勤めている八児中学校という学校は、稲作にすごく一生懸命取り組んでいる学校です。

稲作というものを通じて、小学校と近所にあります保育園、保幼小と一緒に、稲作に取り組むという形で交流を続けてきた学校です。

そういった中で、普通の生活の中では、もう隣の八児小学校と近くの保育園と一緒に交流をしてくれているのですが、先ほどいろんな先生方もおっしゃいましたけど、本校大原小というちょっと離れたところ、上津役中校区のほうに近いのですが、こちらからも数名ずつ毎回入ってくる状況でして、こういったところとの小中連携をどうしていったらいいのかなというのは自分もずっと考えてきていました。

また、自分は音楽科でして、ずっと兼務という形で、ここ10年ぐらいいろんな小学校に行かせていただきました。

小学校と中学校は、やはり発達段階が全然違うので、教え方も全然違うんだろうなと思いつつ、いろいろさせていただいたのですが、やはり小学校の先生がおっしゃるのが、「そういう音楽科というのはすごく専門性が強いので来てほしい」、「難しい」と言われるので、ぜひ私も行きたいなと思うのですが、意外とやはり壁があって、「教えに行かせていただいてもいいですか」と言ったら、「今忙しいから来なくていいです」と言われたこともありますし、逆に自分が管理職に「そろそろ卒業の歌のシーズンだけど」とか、「文化

発表会のシーズンだけど行ってみたいんですが」ということを言ったら、「小学校から来てと言われない限り行かないでいいよ」と言われたことも実際あります。

その中で感じたのは、先生方の意識の部分なんじゃないかと思いました。自分が今日、ご説明いただきました内容の中で、今後検討していただきたいなと思ったのは2つありまして、1つ目が今申し上げました意識改革の部分になります。

小学校に行かれた中学の先生の話をお聞きすると、「何で私がそちらに行くことになったんだろう」という声です。よく聞きます。ということは、そちらに行く意義がよく伝わっていないということだと感じています。そういったところが、やはりクリアにならない限り人の心をしっかりしていかない限りは、この制度は成り立たないのではないかなと考えています。

だから子どもの成長というところを大きな目標として、先生方が一体となれるように、今後研修等を考えていく必要があるのではないかなと考えました。

2つ目は、実際に教務主任として教育課程の編成について考えたことを申し上げます。

実際に4、3、2という形でいくのかどうかは、私はよくは分かりませんが、4、3、2と考えた場合に3、2をできれば近づけていただきたいと、中学校の教員がその3のところから入っていくとしたら、時間割のコマを中学校の教務主任がつかれば、小学校の先生方の負担軽減にはなるんじゃないかと思います。

そう考えたのは、自分が兼務で行くときに自分の空コマで小学校に行くという形がとても多かったので、「どうしますか」と相談をそのときにしていたのですが、やはり教務主任同士の連携を図る、これがとても大事になるんじゃないかと思いました。

当然、小中を見通したコアカリキュラムを考える上では、管理職の先生方がやはり共通の目的意識を持っていただかないといけない。

なので、もう実践事例の中にもありましたが、校長先生、教師、管理職同士、それから教務主任部会、主任部会、といったところが連携していけるとよいのではないかなと思いました。

前任校で小学校の授業研究にも参加させていただきまして、小学校の先生方は本当に教材研究をととても丁寧にされているし、授業組立を一生懸命されているので、学ぶところが大変多いと感じております。なので、そういったところはやはり中学校も取り入れたいと

感じています。

ちょっと今このコロナの状況で、なかなかこう1つの所に集まることはできないのですが、やはり手に手を取って一緒に教育に携わっていったらというふうに感じました。以上です。

座長

ありがとうございました。

ここで閉じると定刻でちょうど終われるのですが、1回目なのでちょっと全体の方針に関わるので、私からも意見を言いたいと思います。

全体の進行については、皆さま方がご意見言ったように、これまでの構想だとか、北九州市の実状に則して連携を一貫という形で進めていくために、どんな課題や方策があるのかというところで議論するのか、もしくは、国だとかの政策の動向を見ながら大きく視点を出すのかというのは、私もさじ加減をちょっと迷っていますし、事務局とも相談、あるいは皆さんの意見を調整しながら進めていくということになるかと思えます。

一貫教育でいうと、先生のほうも指摘をされましたが、今調査結果というのがいろんなところで挙がってきています。

北九州市は既存の学校を活かしてきているので、分離型、小学校中学校を活かした在り方、それから隣接や併設型というもの、それから一体型というものがありますが、一体型になるほど成果が上がっているっていうことは今のところ言われています。

ですから、非行だとか不登校だとかあるいは学力だとか自尊感情だとか、これはいずれもこれを比較すると分離型より、隣接型、併設型これよりも一体型のほうが効果があるという資料が今のところ国だとか研究所の資料では出てきているので、そのような採用をすれば、北九州市も一体型というのをつくっていくといいんじゃないかという話になりますが、ただ、現時点で今その話ではなくて、国が議論している最先端を考えるべきだとなると、国が考えているのは、小中一貫教育学校ですから、こうなると小学校中学校、先ほど人事交流の話が出ましたが、新しい学校種でつくっていく、北九州市でできればそれで考えるということ言えば、この委員会はちょっとかなり先取りになりますが、国の方向に乗っかって結局小学校長、中学校長というポストは半分になるということになったりしますが、ただ人事権は1つの組織ということになるので、今の小中一貫の適正化という在り方ではなく、やはり中規模化

ということのままやると大規模化になってくる可能性があり得るので、中規模化できちんとやっていく必要があるんじゃないかとか、議論もできるのかなということは思っています。

ですから、そこら辺のどのぐらいのイメージを持ちながらここでやっていくのかということなどのさじ加減、皆さん方の意見もいろいろ聞きながらちょっと事務局とも相談をしながら、そのところは調整をしていきたいと思っています。

それとあと、ここでは小中一貫について議論をするということになっており、そのことについて議論していくわけですが、全国の流れで言うと、地方では小中一貫、都市部では中高一貫というのが流れのようです。

北九州市は、小中一貫の主力としてやっていくということだけでいいのかとかいうようなことも気になったりもしながら最低限、市立の公立学校として、小学校と中学校をどうに活用していくのかということが出てくるので、皆さま方から、その子どもたち、あるいは今の既存の学校を活かしながら、どんなことが課題なのかということがあれば、結論は出なくてもこのことについて検討してくれということなどが、この会議の中で意見が出てきたら、提言というか、これは検討が必要だということで申し送って、そのあと参考にしていただくという形で進めていけるのかなと思っていますので、以後何回かに分けて教育課程の在り方だとかというときに、前提は一体型の学校なのか、隣接なのか、分離型なのかによっていろいろと課題はあるのですが、ちょっと上手に整理しながら、進めていければというふうに思いますので、よろしくお願いします。

それでは今日の皆さん方の意見を踏まえて、今後進めていきたいというふうに思いますので、これで一応閉じたいと思います。

次回以降のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

事務局

資料7をご覧ください。

今後のスケジュール案ですが、今回は来年の1月下旬か、2月上旬に開催したいと思います。

また日程調整のご連絡させていただきたいと思ひますし、本日もいろいろご意見いただきましたので、今後の決め方、座長と相談をして、議題を決めたいというふうに考えております。

以上でございます。

座長

ありがとうございます。

それでは次回以降については、また、国の動向等も睨みながらというふうになりますが、日程も併せて、ご調整していただきたいと思います。

最後に教育長から本日の構成員の発言等に関して、感想などお話をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

教育長

初回にも関わらず皆さん熱い議論をしていただいて本当にありがとうございます。

小中一貫、平成25年にできましたこの計画ですが、実は中1ギャップ、あるいは学力向上、そして教員の意識改革、この3つを本来目的にしている進んだとは言いながら、結果的には、では中1ギャップが解消できたかということ、いじめや不登校は増えてきている。

学力向上は図られたかということ、向上はしながらもちょっと足踏み状態、あるいは教員の意識改革は、先ほどいろいろと現場の声を伺うとやはりどこかに壁がある。

このままだったらいけないなといったところで、今回のこの会議の立ち上げになっております。

この会議に私どもとても期待しておりますので、今後とも、熱い議論をぜひよろしくお願いしたいと考えております。

どうも本当に今日はありがとうございました。

座長

本日の議事は以上とし、進行を事務局にお返ししようと思います。

事務局

ありがとうございました。

私のほうから事務連絡でございます。

本日の会議の会議録につきましては冒頭でご説明したとおり公開とさせていただきます。後日、事務局で作成をいたしまして、市のホームページに掲載をさせていただきますのでご了承ください。

その際ですが、議事録の確認につきましては、座長にお願いしてもよろしいでしょうか、皆様よろしいでしょうか。

一同

はい。

事務局

ありがとうございます。

それでは議事録の確認につきましては座長に一任とさせていただきます。

最後になりますが、本日の会議の発言で修正が必要な点や、本日も発言できなかったご意見などがございましたら、11月26日木曜日までに電子メールかお手元の意見聴取票というのをお配りしておりますので、こちらにご記入の上、ファックスでお送りいただければと思います。

それではこれもちまして第1回の会議を閉会させていただきます。